

もしもD10戦でポルナレフが気絶しておらず、闘うことができたら。

ヒリドア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本来なら、DIOに時を止められ、
呆気なくやられてしまう筈のポルナレフ。
しかし、なんとか大した傷もなく、
吹き飛ばされたポルナレフは、
承太郎に手助けするため、
DIOの居る場所へと向かつてゆく……

D
I
O
と
の
戦
闘

目

次

DIOとの戦闘

「俺が時を止めた――」

最後の戦いに挑んだ承太郎、

自らの母を救うため、

仲間の犠牲を亡き物にしないため、

終わりにするために全力で拳を叩き込む。

DIOもやられてたまるか、

と言わんばかりに全力でそれに応じる。

そうして、

幾度か両者が拳を交える。

両者のスタンドに”同時”にヒビが入る。

しかしどちらもヒビが少し入った時点で

崩壊は止まる。

本来なら、ここで決着が着くはずであった。

しかし決着は未だに着いてはいない。

歯車が少しずつずれ、
終わりに大きな影響を与えてしまう。

だが、運命がそれを黙つて見ている訳がない。
しかし対抗手段は無い。

”星の白金”が”世界”を打倒するにはあと一手：
あと少し、時間が足りない。

しかし時間を稼ぐ駒が無い：筈だつた。

”隠者の紫”は戦闘不能、

”愚者”、”魔術師の赤”、”緑の法皇”は再起不能となつた。
だが

まだ一人残つていた。

銀色に輝く戦車が。

敵を貫く銀の剣が。

”本来の歴史”では、呆気なくやられてしまつた騎士が。

「…ツッ、フツハハハハハッ!!

どうやら！打つ手はもう無いようだなア！
祈つてみてはどうだ？

仲間が助けに来てくれるかもしけんぞ！

まア！雑魚が何匹集まつた所で

このDIOには勝てんがな！」

「テメエ……」

「貴様の負けだ！承太郎！」

大人しくこのDIOの血肉に成るが良い！」

諦めるものか、と言の葉を吐く、その瞬間。

「シルバーチヤリオツツ!!」

「お前は……」

「?」

「ポルナレフツ!!」

DIOの身体目掛けて、銀の閃光が煌めく。

その光はDIOの身体に到達し、DIOを貫いた。

それはDIOを死に誘うことはできず、

傷を作ることさえもできはしない。

しかし、星の白金がDIOが肉塊になるまで拳を叩き込む事ができる時間は稼ぐことができた。

「どうだア！D I Oオ！」

「貴様ア！何故生きている！」

「へつ！てめえをぶつ飛ばす為によオ！

あの世から舞い戻つて来たんだぜエ！

今だ！承太郎！やつちまえ!!」

「ツ！しまつ——」

「ツ！

オラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラ

オラアア!!!!

「グツ！グアアア!!!!

バツ！バカなアアア!!!!???

このD I Oがアアア!!!!

重く、速い攻撃がD I Oの体に突き刺さり、

DIOの体は崩れ去る。

「…か…勝った…！」

勝つたぞオオオ!!!

見てるか！アヴドゥル！イギー！

俺達は勝つたぞオオオ!!!」

「やれやれだぜ…」

DIO：お前は確かに強かつた…

強かつた…だが…一つだけ過ちを犯した…

テメエの敗因はたつた一つ…

たつたひとつだぜ…DIO：

たつた一つの単純な答えだ…

テメエは俺を…

いや…俺達を怒らせた…」

—Fin—